

平成 24 年度 京都文化芸術都市創生計画推進フォーラム・文化ボランティアのつどい

100 年後の未来に向けたメッセージ

京都の文化人、芸術家の皆様に、京都の文化芸術に対する想い、こうあってほしいという希望や期待、御自身の熱意、決意など、メッセージをお寄せいただきました。

※五十音順、敬称略

京都に生まれ育った手書き文字の素晴らしさ。伝統に培われた格調の高さ、芯の強さを内面に秘めた書芸術は日本の宝です。

筆を力一杯紙面にたたきつけるパフォーマンス、高度な技術を駆使して創り上げられる書作品。いずれも貴重な日本の伝統文化です。

これを失うようなことがあっては決してありません。

一人一人の心に訴える書芸術を創造し、未来に伝承してゆく力を強めること、今微力ながらチャレンジし続けています。

書家 池田 桂鳳
(京都市文化功労者)

京都は日本文化熟成の地と位置付けられるが従って王道を歩み日本文化の世界への発信基地として人材の育成、施設の充実は必要不可欠となろう。

疲弊し、衰退し、変貌を繰り返してきた歴史を身近にしてきた市民の、そして先駆けて原点を求め復興してきた市民力に期待したいと思います。

自然の叡智に教えられ、導かれて発展してきた日本文化の軸足を再認識出来る機会を市民に提供するのが行政の役目、流されず、信念ある施策に期待します。

日本画家 上村 淳之
(京都市文化功労者)

数年前、パリからの橋の寄贈の申出をめぐって、先斗町から東岸まで鴨川に橋をかける話が京を賑わした。大方は京都らしくないとの意見で立ち消えとなった。京都らしいとは何だろうと、その時思った。四条大橋の百合鷗を模した欄干、市バス座席の御所車の模様。その類を言うのか？明治の琵琶湖疎水や南禅寺の水路閣を、今日の京都市民は、もし今造られれば、みっともないと拒否するだろう。そんな狭量な未来は想像したくない。かつての京都は 17 世紀の世界文明を飲みこんで、豊かな桃山期文化の花を咲かせた。今はずっと世界は広く且つ小さくなっている。それを存分に飲みこんで、京都独自の文化を創る京都。そんな未来を望んでいる。

美術評論家 加藤 類子
(京都市美術館評議員)

民族の出会いは 10 万年かかって形成されるといいます。100 年はおろか 1000 年の単位は、昨日・今日のようなものでありましょう。

京都の街を歩けば、100 年前の、例えば、富岡鉄斎の看板や書画がいたるところに飾られています。そしてそのスゴサに感動します。

今は、機能至上主義が世を掩い、活字万能の様相を呈していますが、「人間復活」と共に、この 100 年間の忘れものである「肉筆には魂がやどる」の復活を信じています。

それは、京都から…。

書家 杭迫 柏樹
(京都市文化功労者)

現代は何事も、手軽なこと、しかも時間をかけないこと、時にはものづくりにデジタルの力を使うことが重要視されています。しかし、百年後のことは、もっと時間をかけ、本来の京都的な辛抱をして、いいものを作ることだと、自然に向かい合って心から感動し何かを写すこと、仕事としては手で描くことを大切にして続けていくことを望みます。京都が輝ける日をたのしみに空から眺めていたいと思います。

京都市立芸術大学名誉教授 鈴木 佳子
(京都市美術館評議員)

京都は湿潤な立地に程良く人が住み、千二百年の芳醇な歴史を内在するバックグラウンドは、創造者にとってこの上ない環境である。

今があって100年後があるのなら、現在を分析しなければならない。このごろ京都人は真に美意識が高いのかいさか疑問に思う。私が描く日本画のジャンルだが描く方向性に曖昧さを感じる。自然に生かされている定めを知り、哲学を作画のベースに置き、深慮ある心から描き直すべきである。学ぶ支柱である各芸術大学の研究室が的を外さず研鑽しなければならない。

そして、何よりも戦争や大災害がないことを祈りたい。

日本画家 竹内 浩一
(京都市文化功労者)

京都は幾重にも折り重なった文化の土台の上に成り立つ都市。それゆえに多くの人を引き付け、さらに多様な芸術文化の層が形成されていくようなユニークな場所だ。異質なもの、新しいものを受容するふところの深さもその土台があるからこそ。願わくは100年後の京都の堆積層の一部になりたい。

染織作家 田辺 由子
(京都市芸術新人賞受賞者)

今音楽業界は、東京中心になっていますが、今後は京都にある日本伝統文化に加え、西洋音楽が世界レベルに育ち、国際的にも注目される文化都市に成長してほしいと思います。それには音楽教育機関のレベル向上、学ぶ環境の整備(楽譜、スコア、CD、DVD)、音楽ホール、スタジオが充実し、多くの演奏家が京都で育ち、活動でき、世界からも音楽家が集えるウイーンやベルリンに匹敵する都市になっている事を願います。

ヴァイオリン奏者 田村 安祐美
(京都市芸術新人賞受賞者)

京都工芸フェスティバルを若い人中心にやって欲しいです。制作工程など貴重なテクニックも、シニアはサブに廻って公開する。

日本中で一番多種の工芸芸術部門のある都市です。各部が少しずつフェスティバルで開花させたとしても20年に一度位しか廻ってきません。

京都の最も魅力である部分が楽しく、美しく、しかし厳しく継承しなければなりません。

現代のお祭りによって作家達も鑑賞者達も刺激しあい又研鑽するでしょう。今一つ京都に祭りが増えてもよいでしょう。それにしても若い作家達が京都文化に憧れて来てくれるのは嬉しいことです。

百年後も工芸美術の都市として輝いていて欲しいものです。

陶芸家 坪井 明日香
(京都市芸術功労賞受賞者)

京都を歩けば、街中の至る所で「芸術」を感じることができる。点在する美術館、コンサート会場。世界に名を馳せる歴史的建造物の数々。それだけではない。新旧の入り混じる街並みの、粋なコントラストに心躍らされたり、ふと小さなギャラリーに立ち寄ってみることだって出来る。街のあちらこちらに、大小の芸術が息づいているのである。

そんな「京都」だからこそ、私はこの地で、私にできる形で芸術に携わってみたい。そして、100年後の未来に繋がるような芸術の発信者を育てていきたいと思う。

ピアニスト 内藤 裕子
(京都市芸術文化特別奨励制度奨励者)

当金庫では昭和 62 年に公益財団法人中信美術奨励基金を設立。毎年、京都の美術文化向上に多大の功績があった芸術家 3 名に「京都美術文化賞」を授与しており、平成 24 年で受賞者総数は 75 名となりました。受賞後、文化勲章を受章されたり、史上最年少で人間国宝に認定された方もおられ、受賞者のその後の活躍は目覚ましいものがあります。また、平成 21 年に開館した「中信美術館」は、地域の皆様が気軽に芸術作品を鑑賞できる場として、大変喜んでいただいております。地域に根ざす企業の使命として、今後も京都の美術文化継承・発展の一翼を担ってまいりたいと考えています。

京都中央信用金庫理事長 布垣 豊
(京都市美術館評議員)

これまでに東南アジアを少し廻って、日本は誇りを取り戻すべきだという思いに駆られた。

このところ、人間的な生活のあり方を考え直すという風潮と、精神性への意識の向上が顕著だと感じていて、激しい歴史の変化の中でひずんだまま置き去りにされてきた日本文化の見直し、立て直しも始まっている。50 年もたてば文明と文化のバランスがとれた良い世の中ができていだろう。100 年後には… 文明が進むことによって環境を破壊しないために、自然と融合した芸術的な都市が完成されている可能性が高い。京都はそのモデル都市になり得るし、微力ながらその杖の一部となれればと思う。

画家 英 ゆう
(京都市芸術新人賞受賞者)

厳しい景気のなかでも京都は多様な芸術に関する活動を支援、エールを送り続けている。芸術に掛ける強い希望、国籍も問わないオープンなマインドは、過去と現在、未来を融合させ、つなげている。だからこそ、伝統を守りながらジャンルを問わない若い世代の芸術家を生み出している。京都の文化芸術の未来は明るいに違いない。

しかし、京都に拠点をおいている作家の数と発表の場や機会、仕事、制作が出来るスペースは徐々に増えてはいるが限りなく少ない。より活性化させ、世界の芸術家が集まる芸術の都市京都になっている 100 年後を想像してみる。

画家 Hyon Gyon
(京都市芸術文化特別奨励制度奨励者)

ある1つの文化の膜の上に、また別の文化の膜がそれを守るように重なることで、長い時間の中で重層的に文化を定着させて来た、というイメージをこの街に持っています。ただ1つの膜だけでは、この街の持つ風に吹き飛ばされてしまいます。この風は文化を取捨選択する「厳しさ」であると思いますが、同時に確固たる文化を育む「強さ」でもあります。映像芸術に関わる身として、100年後にはこの分野の芸術も、この街の重層の中にしっかりと息づいていることを願います。

映像作家 宮永 亮
(京都市芸術文化特別奨励制度奨励者)

生きる為の衣食住が、そこそこ満たされると、人は、生活にうるおいを深める文(あや)を求めるようになる。それはワインを飲むに似て、ただひたすら酔う目的から味って楽しむ方に向う。

その為には、知識、理屈よりも、良いワインを数多く飲むしかない。

文化芸術も良いものを見、聞き、肌で味う事につきる。

幸い、京都には、古くから伝わり、常に革新して磨き上げられた文化がある。京都市民は、それを日々味い、自らと町の風格を高めていかなければならない。

村田機械株式会社代表取締役会長 村田 純一
(京都市文化ボランティア・アドバイザー)

古都京都の四季、風土、文化財、伝統芸能、伝統工芸、風習や食生活に至るまで全てに「ものあはれ」の極みを感じます。

私の一隅を照らす天命は、京都で栄えた「地歌箏曲」の継承と共に、100年後の京都で「二十五絃箏」の魅力と可能性をより多くの方に感じて頂き、これぞ世界に誇る民族楽器・京都の誇りとし発信すべく、二十五絃箏の悠久の音色を積極的に奏でる事です。

伝統と創造—これこそが京都の独創性であり私の生きる道です。

箏曲奏者 横山 佳世子
(京都市芸術新人賞受賞者)